

那谷寺なたでらの造営と開帳

前田利常は多くの普請・作事を行ったが、その中に多数の寺社造営があり、隠居後の小松では、那谷寺の他にも愛宕社ようかくじん・養福院や天満宮が造営された。

天正期に荒廃したとされる那谷寺各堂塔は、利常によって再興・造営されたものである。利常は小松に入ってから間もなく、小松城同様に造営に着手し、本堂・護摩堂ごまどう・三重塔・鐘楼・書院



那谷寺三重塔 本堂などと共に国指定重要文化財となっている

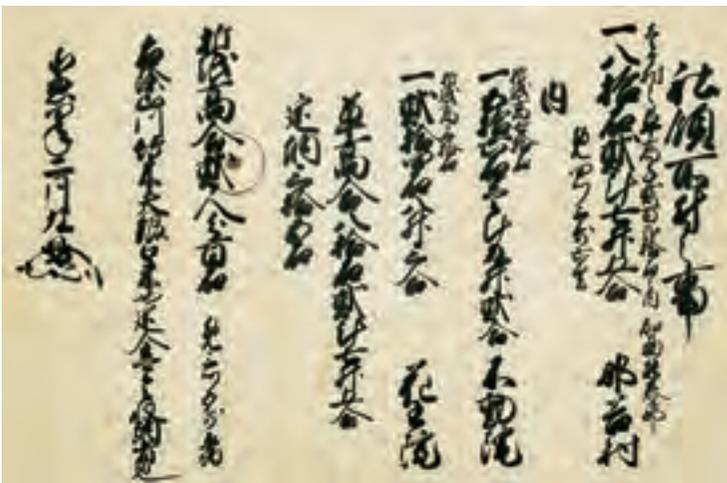
庫裡などが寛永十九年（一六四二）頃には壮麗な姿を現していたと思われる。

三重塔の露盤銘には寛永十九年と記され、「幕府千秋 新君万年 武徳長遠 家運繁榮」などの言葉が刻まれている。利常の那谷寺造営に懸ける願いも見えよう。

「菅家見聞集かんげんもんしゅう」などの史料には、正保元年（一六四四）「那谷之観音堂建立」とあり、慶安二年（一六四九）の「賀州自生山那谷寺入仏記」には「諸聖既以慶安二年巳丑建申」とある。この期が造営完工となるものであろう。

那谷寺の開帳行事は、現時点では慶安二年が最初の開帳開催といえる。これは同年七月十八日の本堂入仏供養に伴って、同日より八月十八日迄の三日間におよぶ開催であった。

開帳行事は仏との結縁けちえんを得る場であり、布教を目的にしたものである。開



承応4年(1655) 那谷寺社領所付(那谷寺文書) 利常寄進の社領地を示す。

帳の目玉となるのは那谷寺の本尊千手観世音菩薩であり、人々は観音との結

縁を求め群参したものであろう。

開帳周期は三三年が一般的であるが、

那谷寺の場合には必ずしも該当していない。例えば開帳一

覧表③と④の間は八年である。

これは不時開帳であり、特例的に認められたものである。

⑧の開催も三三に満たないものであるが、利常の二〇〇回

御忌を理由としたものである(利常の本来の二〇〇回忌は安

政四年(一八五八))。

江戸時代最後の開帳となつ

たであろうものは、元治二年(二八六五)三月の開催となる。

参詣者は近在のみでなく、金沢などからも多くの参詣者を

集めた。参詣は山代・山中などの温泉地での宿泊を伴い行

楽の様相を持った。

会場となる寺院前には茶

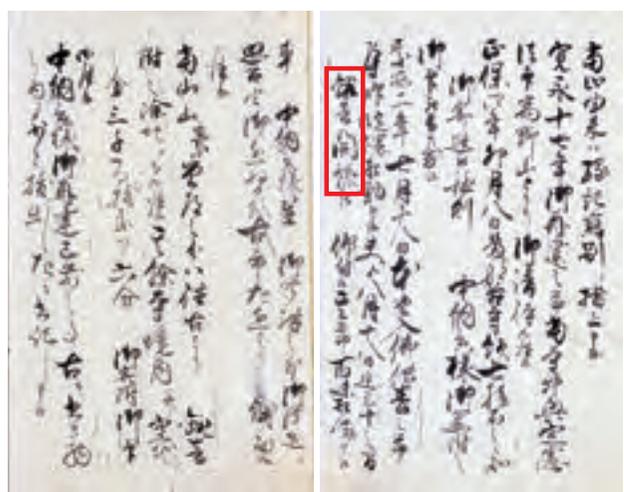
屋が軒を並べ、元治二年の開

帳では、芝居小屋や見世物小屋数十が立ち並んだ。門前周

那谷寺開帳一覧

①	慶安2年 (1648) 8月
②	宝永7年 (1710) 6月
③	元文5年 (1740) 5月
④	延享5年 (1748) 7月
⑤	明和7年 (1770) 6月
⑥	享和2年 (1802) 3月
⑦	天保4年 (1833) 3月
⑧	嘉永5年 (1852) 3月
⑨	元治2年 (1865) 3月

①「那谷寺由来書」『小松市史』「寺社」編、②～⑥「日記頭書」『加賀市史料』6、⑦「那谷寺観音開帳一件」①に同、⑧「小松旧記」、⑨『梅田日記』より作成



那谷寺由来書(那谷寺文書)慶安2年観音開帳の記事

辺が開帳の開催によって繁華な行楽の場に一変する様うかがえ、地域経済の活性を促がすものでもあった。

(宇佐美孝)